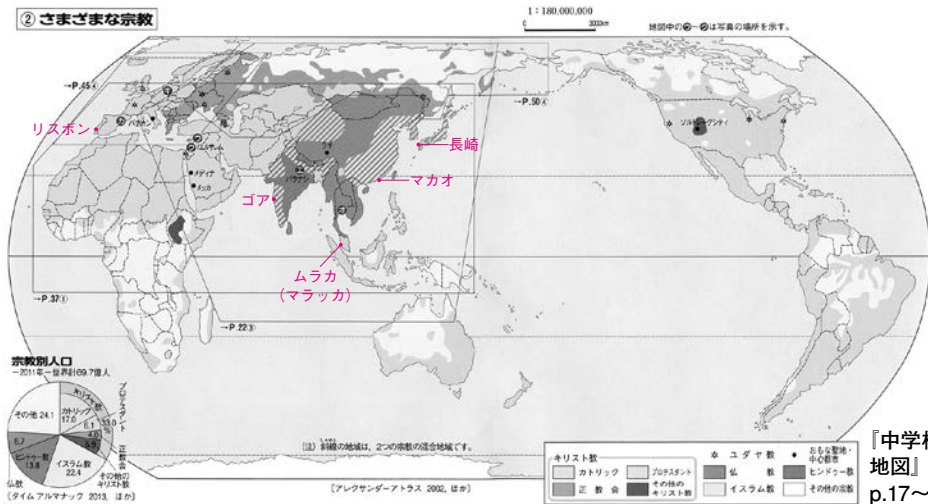


トピック

風とキリスト教政策に翻弄された使節団

伊東マンショ肖像発見 イタリアで個人蔵 鑑定で判明 (読売新聞 2014/3/17夕刊より)

安土桃山時代、ヨーロッパへ派遣された天正遣欧使節の正使、伊東マンショ(1570?~1612年)の肖像と記された油彩画がイタリアで見つかった。(中略)1585年、ベネチア訪問時の姿を、当時の大画家ティントレットの息子であるドメニコ・ティントレット(1560~1635年)が描いたと位置づけている。(後略)



◇ニュース解説

天正遣欧使節は、イエズス会の日本における布教活動の成果をヨーロッパに誇示するとともに、日本人にヨーロッパの事物を見聞させて世界に目を開かせようとする目的があった。そのためキリシタン大名の親戚筋からメンバーが選出され、大友氏の親戚から伊東マンショ、有馬氏と大村氏の親戚から千々石ミゲルが選ばれた。同時に原マルチノ、中浦ジュリアンが副使に任命され、いずれも10~15歳であったことから少年使節団といわれる。

1582(天正10)年に長崎を出港し、2年半かけてヨーロッパに到着した一行は、遠い国から来た王子としての礼で迎えられた。折しも謁見したローマ教皇が2週間後に逝去し、新教皇が就任の挨拶で礼拝に赴く際の大勢の列の中に、馬に乗って同行している使節団の姿がバチカン宮殿の壁画に残されている。使節団はその後イタリア各地を歴訪し、ベネチアを訪れた際に描かれたのが記事の肖像画である。

◇地図帳をながめて(教材化の視点と授業例)

『社会科 中学生の歴史』(以下、教科書)の第4部の1章「大航海によって結びつく世界」と2

章「戦乱から全国統一へ」は、「ヨーロッパ人來航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係」(学習指導要領 2 内容(4) 近世の日本 ア)を通して、「近世社会の基礎がつくられていったことを理解させる。」(同前)ことを内容としている。

ここでは、季節風等を利用した大航海や宗教改革の影響など、世界的視野から遣欧使節とキリスト教への対応の変化をとらえさせたい。

① ポルトガル・スペインの海外進出

『中学校社会科地図』(以下、地図帳) p.17~18 「②さまざまな宗教」からキリスト教のうち、カトリック信仰者が多い地域を確かめる。ヨーロッパ西部と北アメリカ大陸の南部から南アメリカ、アフリカ大陸の南西部の海寄りの地域やフィリピンに多く分布していることが読み取れる。また、地図帳同ページの「①さまざまな言語(公用語)」からポルトガル語やスペイン語が使われている国を確かめる。ブラジル、アンゴラ、モザンビークではポルトガル語が使われ、中南米ではスペイン語が多く使われていることがわかる。マカオは20世紀末までポルトガルの施政下にあった。これら

のことから、スペイン・ポルトガルの海外進出、イエズス会等の布教活動の痕跡を読み取ることができると同時に、使節団の寄港地（長崎—マカオ—ムラカ（マラッカ）—コーチン—ゴア到着（1583年11月）—「喜望峰を回って」*—リスボン（1584年8月）*〔 〕は経由地）も理解できる。

② キリシタン大名

16世紀後半、西日本各地にキリスト教に改宗したいわゆるキリシタン大名が現れる。地図帳p.164「①昔の国名と国境」を見ながら、洗礼を受けた順に「肥前」の大村純忠、「摂津」の高山右近、「豊後」の大友宗麟、「肥前」の有馬晴信、「豊前」の黒田如水（官兵衛）、「肥後」の小西行長（洗礼年不詳）である。とくに北西九州の藩主が多く、その藩における庶民の信者も多かった。

③ 季節風を利用した航海

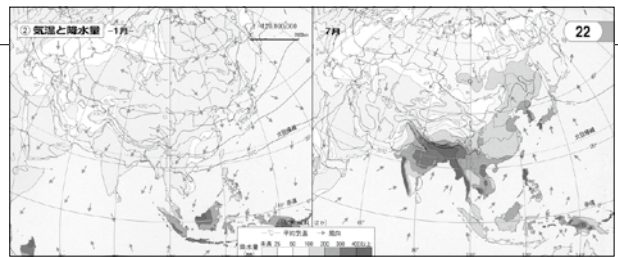
地図帳p.22「②気温と降水量」から、アジアでは冬に北寄りの風、夏に南寄りの季節風が吹くことがわかる。教科書p.86～87の『南蛮屏風』に描かれた南蛮船は、大きなマストが3本立っている帆船であることがわかる。

ポルトガルはインドのゴアを拠点に中国の生糸や絹織物、陶器などを満載し、おもに夏に季節風によって日本へ来航。商品を交換比率のよかった日本の銀と交換し、銀を通貨に使用していた中国に持ち込み、莫大な利益を収めていた（教科書p.87「世界の銀を支えた石見銀山」参照）。

天正遣欧使節が長崎を出発したのは2月で、北西からの季節風を利用して旅立ち、8年5か月ぶりに長崎に到着したのが南東の季節風が吹く6月だった。

④ キリシタン教の受け入れから黙認、そして迫害

1587（天正15）年、秀吉は高山右近や小西行長らとともに九州遠征を行い、その帰りに九州におけるキリシタン教の勢いを直接見聞し、一向宗より



『中学校社会科地図』 p.22

も天下統一にとって危険であると感じた結果、突如「伴天連追放令」を出すにいたった。ただし貿易船は別であると付記されていた。

一方、遣欧使節団は1591年1月、聚楽第で秀吉に謁見した。持ち帰った世界各地の地誌などの新知識、印刷機による聖書等の印刷、服装などいわゆる南蛮文化が流行し、キリシタン教の最盛期を迎えた。17世紀初めにはキリシタン教信者は30万人とされる。信長はキリシタン教や南蛮文化を受け入れ、秀吉はキリシタン教の勢いに脅威を感じ伴天連追放令を出すものの貿易の利益に着目して黙認、そして家康の時代になり、プロテスタントの特定の国との貿易を除いて鎖国令を出し、キリシタン教は禁教そして迫害へと至る。

⑤ 日本人の矜持

さて、宣教師のフランシスコ=ザビエルや後輩のルイス=フロイスは、ゴアのイエズス会に宛てた手紙（日本通信）のなかで、「日本の国民は、私たちが接した国民のなかで一番素晴らしい」、「つつしみ深く、行儀正しい」、「国民の大部分は読み書きができる。また自分を高めようとする気持ち強く、知識欲に富んでいる」と書いている。日本の社会がこれまで持続発展し、国民性が高く評価されているのは、このような矜持を保ってきたからではないだろうか。

<参考文献等>

- ・『日本歴史大辞典』（全22巻）河出書房新社 1956～61年
 - ・大村市観光振興課ホームページ 等
- （元全国中学校地理教育研究会会長 宇野彰人）

書籍
紹介

『悩める社会科教師のために

授業がみるみる盛り上がるひ・け・つ！

—地図帳を活用した「日本の諸地域」の授業— [Kindle版]

宇野彰人 著 Kindle 購入価格：324円（消費税込）

もっと地理を楽しく！ それは生徒と先生共通の願い。もっとおおらかに地域をとらえるためのツールとして「地図帳を活用しよう」というメッセージが本書には込められている。

「地図帳の使い方」を児童生徒が独習できる第2作も近日刊行。

